

---

## ランチョンセミナー 18

5月17日(日) 12:50～13:40

第11会場 福岡国際会議場 5F (503)

### 精度管理の重要性を考える！

#### 精度保証とサーベイの評価との関連性を探る

講演者：前川真人(浜松医科大学 臨床検査医学 教授)

司会：篠原克幸(福岡大学筑紫病院 技師長)

共催：和光純薬工業株式会社

---

近年、臨床検査はEBMにおける客観的な指標として、その重要性がますます高まってきている。IFCCのホームページにも診療カルテにおける客観的な指標の94%を占め、臨床判断を行う上で60-70%の影響力を持ち、診療ガイドラインの37%に関与していると記載されている。しかしながら、客観的な指標としてデジタルで表されるため、その値の違いは患者診療にとって好ましくない影響を及ぼす結果を招きかねない。患者や医療関係者の多くは、測定法や施設によって測定値が異なることを理解していないため、情報公開を積極的に行う必要がある。また、測定という段階では、どこでもいつでも同じ検査結果を得る体制の構築が肝要である。個々の検査室で大切なことは、検査法の基礎・意義・留意点・ピットフォールなどを熟知して、適切な内部精度管理を行った上で分析を行うこと、さらには国際的に進められている臨床検査のハーモナイゼーションを理解し、それに呼応してデータの収束を進めていくことである。

演者は、日本医師会の臨床検査精度管理調査検討会の委員として十数年関与してきた。先達の努力により、多くの項目で標準化が進んできたのは日本の臨床検査

の誇るべき所である。測定値が非常に収束してきた検査項目もあるが、標準化やハーモナイゼーションが進んでいない項目では、測定法によるバイアスが大きいものもある。さらに、検査法についての知識不足や誤記入などのために、芳しくない成績となっている施設がある。例を挙げて紹介・解説したい。

臨床検査は分析することが全てではない。それは検査部で行うことの大きなものではあるが、それだけではない。国際的なハーモナイゼーションの流れも臨床検査全体の過程を対象としており、分析前、分析後の過程も重視している。日本医師会臨床検査精度管理調査で、測定値だけでなく、単位や検量法、緩衝液の種類などの調査を行うのは、統計資料としての目的だけでなく、検査前後の過程も調査していると理解していただきたい。

本来の分析、すなわちヒト血清試料の日常分析を正しく外部精度管理調査として評価するためには、今使用しているマトリクス効果のある調査試料では好ましくないと考える。今後、ヒト血清ベースで、日常扱っている試料により近い性状をもつ調査試料を使用して、年に複数回行うNEQASの構築が必要と考える。